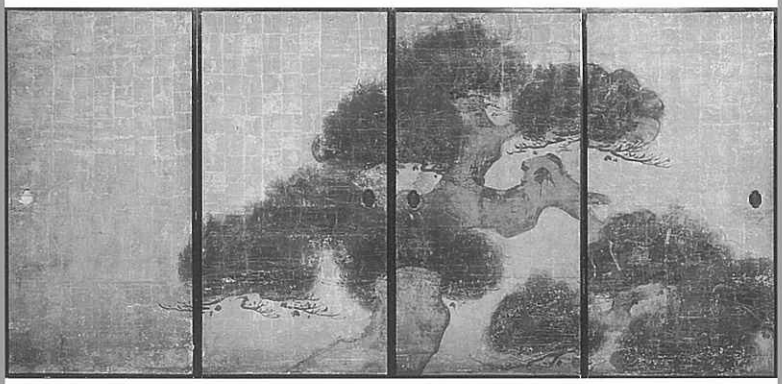


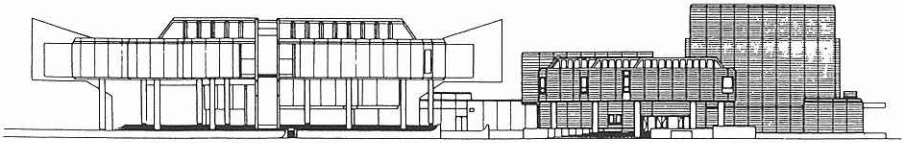
松図襖　狩野尚信筆　鍋島報效会蔵　※２～３頁に資料紹介

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

20 January 2003

No. 129



資料紹介

鍋島報效会所蔵の狩野尚信筆《松図襖》

ここで紹介する資料は、江戸時代に佐賀藩主だった鍋島家に所蔵され、近年まで東京に保管されていた襖絵であるが、伝来の経緯については知られていない。平成11年、財団法人鍋島報效会の徴古館（佐賀市）開催の第三回展後期（1月5日～2月5日）において、はじめて公開された。翌12年、財団法人鍋島報效会に寄附。昨秋、当美術館企画展「佐賀鍋島藩の美術」（平成14年10月25日～11月24日）に出品され、くわしくみる機会を得たので、その概要を以下に記しておきたい。

紙本の全面に金箔がおされた4面の襖には、あざやかな色彩で松だけがえがかれている。本紙の大きさは、縦173.1cm・横89.3cm。4面それぞれの紙継はいずれも6段で、最上段を第1紙とすると第1紙と最下段の第6紙の紙幅が狭く、それ以外の4紙はいずれも35.2cmから35.6cm程度。金箔の大きさは計測可能なもので、縦9.4cm・横9.8cm程度となっている。

むかって右端を第1面とすると、第4面の左隅下方に落款がみられ、「尚信筆」と署名されている。したがって作者は、狩野尚信（1607～50）であると想定される。さらに署名の下の印2顆は、金箔に押すためか判読が容易でないが、これまで紹介される尚信作品におされた印と照合すると、印文「狩野」の朱文方印と、「藤原」の朱文円印であると確認できる。同時にこの照合によって、尚信の印と認めてよいものとおもわれるし、のちにふれる描法からも尚信の特徴は指摘されるので、作品そのものを尚信の真作と断定したい。

保存状態は、顔料の剝落、擦れや破れによる無数の傷跡、第4面の引手金具の欠失などがみられ痛々しい。葉叢の緑青が剝落して下書きの墨線が露出したり、樹皮をあらわす墨の描写が彩色とともに失われたところも散見される。それでも金箔を背景に、ずんぐりとした幹や枝、厚みのある葉叢は清新な印象であるし、左端に大きく空間をとった構成も活かされており、作品の魅力は失われていない。

尚信は狩野探幽（1602～74）の弟である。尚信は探幽の影響を受けながらも、潤いのある水墨描写に特色を示している。一方、この襖絵のような本格的な着色画は、紹介例がすくない。

この襖絵との関係では、有名な二条城二之丸大広間障壁画のなかの探幽作品が想起される（松鷹図壁貼付・松鷹図杉戸）。二条城障壁画制作には、尚信も探幽と共にたずさわっており、探幽作品と描法が共通する点はいうまでもない。一方、異なる点も観察され、たとえば尚信による葉叢の方が重厚であるし、幹の輪郭や下枝などの墨描線は一見、粗野にみえるほどの勢いが感じられる。

この襖絵を尚信作と確認することで、尚信の個性がよりあきらかになるとおもわれる。

また制作時期については、寛永3年(1626)作の二条城障壁画との親近性や、署名がほかに類例のない謹直な楷書体である点などから、比較的若年の作と推測しておきたい。

第4面落款（原寸）

（当館学芸員　福井尚寿）

第2面

第3面

第1面

第3面

第3面

第3面引手

研究ノート

絵画制作における藩主の関与

―初代佐賀藩主鍋島勝茂の場合―

・江戸藩邸の作事

江戸時代の藩関係の絵画制作において、藩主はどの程度まで関与していたのであろうか。このことについて、『佐賀県史料集成古文書編』第14巻（327頁～　佐賀県立図書館　昭和48年３月30日）「有田家文書」のなかに興味深い文書が残されている。以下は、初代佐賀藩主、鍋島勝茂（1580-1657）の覚書からの引用である。

Ⅰ　鍋島勝茂覚書写［有田左馬助宛／２月９日付］

一、今有之おうへ奥ニ間、金之間ニなし候様ニと申付候、鉛多ク不入様ニ、絵なとも上手之絵書ハ無用ニ候条、其心得可申候事、

Ⅱ　鍋島勝茂覚書［岩村忠兵衛尉宛／2月9日付］

一、今有之おうへの奥ニ間之儀、金之間ニ可仕候、左候者、鉛多不入様ニ雲形を仕、間丶は金銀之大すなこニ可仕候、岩水なと書候所、こんしやう水多候てハ、是又不入事候、こんしやう水もくまを取候様ニはきかけニ可仕候、小すなこハ鉛多入候条、其心得可申付候事、

一、絵書之儀、爰元よりハ不差上せ候条、賃取之者ニ書せ可申候、上手ハ不入事候、絵もあらあらと手間不入様ニ可仕事、

この初代藩主勝茂の覚書は、前後の文脈などから、いずれも慶安２年（1649）の江戸藩邸作事にともなう、「おうへ奥二間」を「金之間」とする改修についての記述と知られる。つまり、この慶安２年４月16日（寛元事記／勝茂公譜考補では４月19日とする）勝茂の孫にあたる鍋島光茂（1652～1706／後の２代藩主）と、米沢藩主上杉定勝の娘於虎との祝言がおこなわれており、光茂の妻を迎えるため、江戸藩邸の改修工事が計画されたのである。

この覚書の時期、勝茂は佐賀にいた。Ⅰは重臣の有田左馬助に宛てたもので、上記引用の前文に岩村忠兵衛を作事奉行とすることや、作事は「よろず手軽く」、「いらざる家などは建てず、また間広い所はないよう」前置されている。Ⅱは岩村忠兵衛へ宛てたもので、作事奉行として江戸へ遣わすこと、有田左馬助の頭人を作事方に申付けたことに加えて、ここでも「みだりに物はいれず、よろず手軽く」おこなうべきと、念をおしている。

作事のおこなわれた江戸藩邸については、「おうへ」が「御上」だとすれば、上屋敷のことであろう。佐賀藩の上屋敷は外桜田に位置し、「桜田御屋敷」と呼ばれていた。Ⅱには引用以外の文中に「上屋敷」という記述がみられるので、上屋敷内の「おうへ」という場所をさしているのかもしれない。

・障壁画制作の指示

覚書で「金之間」にするとは、おそらく襖や壁面に金銀箔を貼るということで、そこに岩や水をえがいて豪華な部屋にする計画であったとおもわれる。Ⅱの覚書により、このとき勝茂が与えた具体的な指示の内容をみてみよう。

⑴箔は多く入れず、雲形に貼り、雲形以外の部分は金銀の大きめの砂子とする。

⑵岩に水などを描くところでは、「こんしやう」による水の描写は多くなくてよく、その「こんしやう」による水の描写は隈を取るように「はきかけ」にする。

⑶小さな砂子は多くてもよい。

⑷絵書（えかき）、つまり絵師は佐賀から派遣せず、江戸の「賃取之者」絵師に描かせてよい。上手な絵師でなくてよい。絵もあらあらと手間をかけないでよい。

「金之間」なので、覚書の「鉛」は金箔のことにちがいない。⑴と⑶は、その金箔の使用についての指示であり、金箔は雲形の部分にとどめ、そのほかの部分では金銀の砂子でかまわないというのだ。

ところで金箔が佐賀の特産であったことは、あまり知られていない。嘉永から安政頃の成立と推測される『肥前名物題註』（『肥前史談』第13巻第５号／昭和14年６月）に次のような記述がみられる。

金箔　本邦の制に妄りに黄金を糜するを得ず。其免許を蒙るもの、海内唯六所と云ふ。我が治下其の中にあり。材木町、駄賃町、本庄祠前並びに金箔を製す。

国内で金箔製作を免許された6箇所のうちの一つが佐賀であったと伝えている。また慶安３年（1650）３月、江戸城西ノ丸普請の際、勝茂が金箔10万枚を献上したことが知られる（勝茂公譜考補『佐賀県近世史料』

第１編第２巻758頁　佐賀県立図書館　平成６年３月)。金箔の製造は勝茂の時代からおこなわれていたのであろう。「金之間」自体、金箔を特産とするところからの発案だったと考えられないだろうか。

⑵の「こんしやう」は紺青のことで、土佐光起『本朝画法大伝』の「画具製法並染法極秘伝」の項によれば、紺青は「大（コン）青」とも書くとしたうえで、「大青（コンジヤウ）〔石也、内より浅（グン）青を出す、製法緑青に同じ、まず粉中に指を入見るに、そのまゝ指につくは真の紺青、付ざるは花紺青也、膠深(コク）して入少しすりて筆頭にてぬる、曲は膠水にて取、真の彩色には下ぬり浅黄ぬり也、行には直にぬる也〕」と記述されている。

また同書「水」の項に、「大青ぬり銀泥にて波文」をえがくとあるように彩色画の場合、水はもっぱら紺青で彩色された。この紺青による水の描写は、少なくてよいとする。また隈取るように「はきかけ」にするとは、濃密に彩色するのではなく、塗り残しをかまわず、輪郭線主体にさらりと刷くように塗ることをいっているのであろう。

⑷の「賃取之者」絵師とは、お抱え絵師クラスではない、市井の絵師をさすと考えられる。

以上、金箔・紺青・絵師についての勝茂の指示は、経費節約のためと考えられる。「金之間」という豪華な部屋を計画した一方、苦心の様子がうかがわれる。

この「金之間」がつくられたとおもわれる桜田屋敷は、明暦３年（1657）の江戸の大火で焼失し、その後も何度か火災によって建てかえられている。この二つの覚書は藩邸内の障壁画の状況を伝える貴重な史料であり、同時に藩主勝茂みずからが経費節約を旨とし、制作の具体的な点まで指示を下していたことは注目される。

・そのほかの事例

勝茂はほかにも、御用刀工の忠吉（初代）に対して刀と脇指の長さをはじめ刃文の形や銘の切りかたまで、みずから指示を出した文書が知られている（福田酔剣・寺田頼助『肥前の刀と鐔』上82頁～雄山閣出版　昭和49年４月)。勝茂が関係した美術品については、制作の具体的な点まで勝茂が関与した可能性を考える必要がある。

絵画制作において、勝茂が関与した可能性のある作品を下記のとおりあげておきたい。

○釈迦・迦葉・阿難像　狩野探幽筆　３幅

鍋島家の菩提寺、曹洞宗高伝寺（佐賀市）の所蔵で、「肥前の太守の命により恵日山高伝禅寺のため画いた」と探幽みずから記す。この３幅対の左右幅は墨画だが、中幅釈迦図だけ肉身部に金泥が使用されている。勝茂の道具のなかに、もう一点金泥を使用した探幽作品がある。紺紙に金泥による《達磨・朝陽・対月図》３幅（鍋島報效会蔵）で、大徳寺の清巌宗渭による賛も金泥による。これら２点は金泥の効果的使用という点で、探幽のなかでも特異な作例ということができる。本稿で紹介した「金之間」や、佐賀が金箔を特産としたことをあわせて考えれば、両作品の金泥の使用は勝茂の指示であったのかもしれない。

○見瀧寺縁起絵　１幅

勝茂がみずから再興した天台宗見瀧寺に寄進した作品で、見瀧寺の子院、宝地院（小城町）の所蔵。江戸藩邸（桜田屋敷）内の場面には、勝茂と妻高源院の姿がえがかれていて、勝茂の指示によるものと考えられる。

○洪浩然・薮内紹智・志波喜左衛門像　３幅

佐賀市の個人所蔵。浩然・紹智・喜左衛門の３人が、それぞれ得意とする筆・茶口・三味線をたずさえた特色ある肖像画で、『雨中之伽』に勝茂がえがいたと記述されている。この作品が『雨中之伽』に記述されるそのものか否かは不明。

（当館学芸員　福井尚寿）

レポート

「夏休みこどもミュージアム２００２」

―みる・あそぶ！ しらべる・つくる！―

2002年の夏は格別暑かったようだ。連日、火の玉さながらに太陽が容赦なく照りつけ、人も動物も草木も、やっとの思いで地上にへばりついて生き抜いてきた。あまりの暑さに意気阻喪する大人たち、それでもやはりこどもたちだけは元気だった。

わが県立博物館・美術館の夏はこどもたちに始まってこどもたちに終わる。県立博物館・美術館が昨年夏７，８月に取り組んだ「夏休みこどもミュージアム２００２」を振り返って、そんなこどもたちの生き生きとした姿を報告する。

夏の博物館・美術館はこどもの世界

こどもたちが博物館・美術館に足を運ぶようになるには、何かきっかけが必要だ。県立美術館では平成11年夏から、こどもたちの興味を引くテーマで様々な美術表現を紹介する常設特別展「こども美術館」を始めた。例えば動物をテーマにすると、絵画や彫刻は勿論、陶磁器だって考古資料だって、動物が登場するものなら何でもＯＫ。いつもは威厳に満ちた獅子の襖画も、ここでは不思議とユーモラスな動物に生まれ変わり、全体が親しみある展覧会になった。

平成１３年度からはエリアを博物館にも拡げた。さらに展覧会だけでなく、各種の教室を加え「夏休みこどもミュージアム」として拡充させた。これらの催しの中から、こどもたちの様子をいくつか紹介しよう。

「消えゆくいきものたち」ギャラリースケッチ

展覧会のメインとなる常設特別展「消えゆくいきものたち」は、当館では久々の自然史展。とくに珍しい資料というよりは、「昔はどこにでもいたが最近はあまり見かけなくなった」トンボやメダカが主役。絶滅危惧種を中心に県下の動植物の現状を紹介し、環境保護の大切さをうったえた。もともとこどもたちは自然が好きだ。佐賀の「昔と今」も親子の語らいの場となって、例年以上に多くの観覧者があった。また、展覧会にこどもたちの参加を取り込んだギャラリースケッチ「いきものの色と形」では、会場内で剝製や標本の観察画を描いて即、展示。たった２日間ではあったが、予定していた壁面はすぐに一杯になってあふれた。

展覧会では他に、テーマ展示コーナーで「君も米づくり探検隊！」を開催。昨今、学校の総合的学習でよく取り上げられる米作りをテーマに、農作業の四季を描く農耕図や実際に使われた農具等を展示し、昔の米つくりを今と比べた。

体験からはじまる

一方、こどもを対象とした教室はメニューが豊富になり、とくに盆前は毎日何かやってる感じであった。「昆虫・植物標本作成教室」は先の常設特別展とも連動した３日間の実技教室。博物館の周り城内公園は堀と木々に囲まれた意外な街中のオアシスである。親子が一緒に昆虫を追いかけていた姿が印象的であった。

「竹細工チャレンジ教室」では竹を使って編み物や竹笛、竹鉄砲づくりに挑戦した。プロの職人により目の前で１本の竹から細い竹ひごが次々と手際よく作り出される技に、こどもたちはただただ唖然。昨年に比べて簡単な２日間のコースにした。

「博物館こども大学」は今年から始めた。４日間のコースで、初日は今人気の軟質の滑石を使った「勾玉づくり」に挑戦。自分だけの勾玉を首に下げて帰れるのがよほど嬉しかったらしい。２日目の「進め！佐賀城探検隊」では炎天下をお堀に沿って佐賀城の要所を探訪。本丸跡で現在復元建設中の本丸御殿を見学し、石垣に使う大きな石を矢で割って見せる実演に思わず声が挙がった。３日目の「お堀の中の小さないきもの

たち」ではお堀の水の中に生きている原生動物を顕微鏡で観察、初めて見る顕微鏡の世界が生命の神秘を感じさせたようだ。４日目の「昔の農具-見て・聞いて・体感」は千歯こきや唐箕で実際に稲束の脱穀などを体験。昼は弥生食を参加者全員で食べた。メニューは赤米ブレンドのお粥を土器で焚き、おかずはイノシシ肉とアジの干物。イノシシ肉は前評判に違い、いざ食べてみるとたいへん美味で完食。真夏の炊事は準備が大変だったが、これも弥生体験。

「こども学芸員」は中学生２チームが３日間をかけて美術館の絵を自分で選んで解説書を作成するなど学芸員の仕事を体験。最近では、授業に職場体験を取り入れる中学・高校が増えてきている。こどもたちの成果は美術館常設展「昭和の絵画」で紹介した。

その他、１日だけの野鳥観察会「佐賀城公園の夏鳥」を開催した。

こどもミュージアムのゆくえ

今回、展覧会や教室に参加したこどもたちは小学生でも低学年・中学年が大半であった。その分、保護者が同伴することが多くなる。それが期せずしてひと時の大切な親子のふれあいの場になったようだ。また、展覧会では今年、地域の子供クラブがまとまって見学するケースが多かったように思う。常設特別展のテーマが自然環境に関わることから、全校生に観覧と感想文の提出を課題として与えた中学校もあった。これらは、平成14年度から小中学校で総合的学習の時間が本格実施され、学校外での受け皿づくりが求められている最近の動向と無関係ではないように思われる。

さて、夏休みのこどもたちに博物館・美術館に親しみ楽しんでもらおうと始めたこどもミュージアム、やってみると今後注意しなければと思う点も色々見えてきた。

まず、展覧会でも教室でも、館の施設・人材の特色を生かしたメニューと内容の工夫が必要だ。やれるものは限られている、他と同じものもある。要はたえずこどもたちの関心に目を向け、試行錯誤しながらでもそれに応える努力を重ねていきたいものだ。

また、あらゆる催しは、できるだけこどもたちと一緒になって楽しみたいと思う。こどもたちは敏感だ。説明や実技指導の際、一段高みに立った“教育的配慮”とやらが見えてしまうと、もうついてこない。博物館等が行うこういった体験型の催しは、大人の目から見るとたわいのないものであっても、こどもにとっては初めての実感、貴重な発見が含まれていることが多い。新しい世界への扉は、まずは楽しんでもらうことから開く。担当する学芸員がこどもたちと一緒に楽しめないようでは、こどもたちに伝えられるものは何もない。

それから、担当者が一番悩むのが参加者集めだ。せっかくの計画でも、情報が十分に広報されないと話にならない。とくに教室の生徒募集は、昨今とにかく同じようなものがやたら多いから、マスコミだってそうはつきあってくれない。マスコミを有効に活用するための工夫と、とくに学校との連携が重要だ。

「博物館・美術館にいけばきっと何かやっている」と期待され、いつも目を向けさせるまでには、まだまだ努力が必要らしい。　　（学芸課　田平徳栄）

博物館こども大学「勾玉づくり」

博物館こども大学「進め！佐賀城探検隊」

平成14年度佐賀県立博物館常設特別展

肥前国産物図考の世界

主　催：佐賀県立博物館
会　期：平成15年１月31日㈮～３月２日㈰
会　場：佐賀県立美術館２・３号展示室
観覧料：無料

ギャラリートーク　担当学芸員による展示解説

期間中土曜日（２/１，８，15，22、３/１）いずれも午後２時より

日　誌

■平成14年度博物館実習
期　間：７/１㈪～12㈮
実習生：11名

■教職員研修の受入れ
期　間：７/23㈫～８/24㈯
実習生：５名

博物館実習

竹細工チャレンジ教室

■夏休みこどもミュージアム
「昆虫・植物標本作成教室」（７/23～25）
参加者：27名（小・中学生）
「博物館こども大学」（７/30，31、８/６，７）
参加者：30名（小学生）
「野鳥観察会」（８/３）
参加者：20名（小・中学生）
「竹細工チャレンジ教室」（８/10，11）
参加者：26名（小学生）
「こども学芸員」（８/22～24）
参加者：６名（城東中学校、川副中学校）
「ギャラリースケッチ〈常設特別展示「消えゆく いきものたち」〉」（８/１，２）
参加者：133名（小・中学生）

佐賀県立博物館・美術館報　第129号　平成15年１月20日
編集発行　佐賀県立博物館・美術館
〒840-0041　佐賀市城内1-15-23　TEL0952-24-3947　FAX0952-25-7006
印　　刷　大同印刷株式会社